

# チルソクの夏

2004(平成16)年7月18日鑑賞(心齋橋パラダイスクエア)

★★★★



監督・脚本=佐々部清／出演=水谷妃里／上野樹里／桂亜沙美／三村恭代／高樹澪／谷川真理／竹井みどり／岡本舞／淳評／松本敬一郎／山本譲二／金沢碧（プレノンアッシュ配給／2003年日本映画／114分）

……チルソクとは韓国語の七夕のこと。年に1度開催される韓国の釜山と下関の高校生による陸上競技大会での郁子と安くんとの出会いは淡い初恋に……。時は1977年7月7日の七夕の日。翌年の七夕での再会を約束した2人だったが……。2003年7月7日、10年ぶりに再開された大会の中、見事にスクリーン上によみがえる26年前の大会と仲間たちの姿。誰もがもつ初恋の思い出を瑞々しく描いた好作品。



## 2003年7月7日

今日2003年7月7日は関釜親善陸上競技会の日。

韓国の釜山と山口県の下関で交代に年に1度開催されていた高校生による陸上競技大会が、2002年のサッカーワールドカップ日韓共催を機として関係者の努力によって10年ぶりに開催された日だ。

かつて走り高跳びの選手だった遠藤郁子（高樹澪）は、今トラックのスタート地点でピストルを手にしていた。そんな郁子の目には3コースの安仁植（アン・インヒク淳評）の姿が……。

この時郁子の記憶は、26年前の1977年7月7日のあの日にタイムスリップした。そこには26年前の郁子（水谷妃里）たち、陸上競技に情熱を燃やす高校2年生の4人の仲間、杉山真理（上野樹里）、藤村巴（桂亜沙美）、木川玲子（三村恭代）の3人と安くんこと安大豪（アン・テイホウ淳評）くんの姿が……。

## ロミオとジュリエット、そしてチルソクの約束！

郁子はなぜか男の子に関してあまり興味がない。しかし他の3人の関心は当然男の子。そんな3人の会話はいつも男の子の話題でもちきりだ。そして安くんは、もともと巴が目をつけた(?)男の子。

ところが郁子と同じ走り高跳びの選手だった安くんは、郁子が気に入った様子。そのため、外出禁止とされている中、郁子たちの宿舎までわざわざ郁子を訪ねてきた。

ロミオとジュリエットばりに木の枝に登った安くとベランダの上で語り合う郁子。これを見つめる真理、巴、玲子の3人の気持も複雑だ……。

安くんのたどたどしい日本語とそれぞれの片言の英語による会話だが、たちまちそこには淡い初恋の芽生えが……。

そしてそこで郁子は、「来年の七夕には必ず会おうね」と約束。韓国語で七夕はチルソク。つまりチルソクの約束だ。

## 輝いていた1977～78年！

1977年7月7日、釜山での陸上競技大会で出会った郁子と安くん。そして翌78年7月7日、チルソクの夏を下関の陸上競技場で迎えた郁子と安くん。この1977～78年という時代は郁子ら4人組の青春も輝いていたし、日本の歌や映画も輝いていた。

まず、4人組の1人である真理が、ボーイフレンドと一緒に観て涙を流すのは、『幸福の黄色いハンカチ』。そして4人組がそろってベランダで歌うのは、山口百恵の『プレイバック part 2』。また、釜山の選手を迎えた歓迎会で4人組が振りつけて歌うのは、あのピンクレディーの大ヒット曲『カルメン'77』。

さらに安くんが、日本語の歌は禁止されているにもかかわらず、この歓迎会で歌い始めたのは、何とイルカの名曲『なごり雪』。

他方、カラオケブームが始まったのもこの頃。そのためギターをもって夜の街を流れながら稼ぐ「流し」を職業とする郁子の父親隆次（山本譲二）は、次第にその職を失っていくという構造改革の嵐に見舞われることに……。

それはさておき、その隆次がギターで歌う曲は石川さゆりの大ヒット曲『津軽海峡・冬景色』。弁護士登録の数年後、私が某女とのデートで兵庫県加古川市の市民会館までわざわざ聴きに行った石川さゆりのコンサートが開催されたのも1977年だ。今でも多くの日本国民が知っている、まさに輝いていた日本の映画、音楽の時代だ。

## 安くんと郁子は身分違い！

郁子は一人娘だが、「流し」を職業とする父親の稼ぎは悪く、大学へ進学するためのお金など全くなし。だから大学へ進むのなら陸上競技による推薦枠を獲得するしかない。

他方、安くんの父親は外交官。そして安くんも、しばらく日本に住んでいたことがあるというから、かなり身分も高くリッチな家庭。

したがって、安くんたちの家族が住んでいる家は立派だし、その個室も広くて立派。郁子の家やその部屋とは大違い。また、郁子は毎朝新聞配達のアルバイトをしているが、これはお金稼ぎとトレーニングを兼ねた郁子の日常生活の一部。

その新聞配達途中、毎朝鳥居にかしわ手を打って郁子がお願いする内容も、状況の変化に応じていろいろと……。

こんなに身分の違い2人だから、この2人が仲良くなり、万一結婚しようということになったとしても、そこにはもともと無理が……？

## 朝鮮人差別と日本敵視観

2人の淡い初恋と文通による心の結びつきは美しいものだったが、現実はその甘くないものではない。1年後の再会を実現しようとするだけでも大変。まず発生した問題は、文通をめぐっての親からの反対。

郁子の父親隆次は「外国人とつき合ってもいいが、朝鮮人だけは絶対に許さん！」と言うし、他方安くんの母親は、「私のおじさんは日本人に殺されたのよ！」と言い放ったうえ、郁子に対して文通をやめてくれという手紙を送ってくる始末……。

安くんや郁子たちの世代では、「なぜ……？」と思うことでも、その父親や母

親の世代になると、朝鮮人差別と日本敵視観から逃れることはできないため、「日本人と韓国人（朝鮮人）との交際などはもつてのほか！」となるのは、ある意味当然のことだった……。

## 日韓高速船補助金住民訴訟判決とは？

この映画には数回、釜山と下関を結ぶ大型フェリーの雄姿（？）が登場する。下関を去っていくフェリーに乗った安くんを見送るため、懸命に走り続ける郁子の姿も印象的だった。

このようにこの映画で大きな役割を果たす日韓高速フェリーだが、この高速フェリーは、経営破綻した（再建の見込みのない）第三セクターに対する補助金の支出の違法性をめぐる訴訟において、市長に対する損害賠償請求が認容されて世間の注目を集める判決となったもの。

第三セクターとは、官でもなく民でもなく、官民の共同出資で設立された会社のこと。官が出資したにもかかわらず、その出資を受けた第三セクターが破綻すると、その出資金はパーになってしまうが、その出資金は税金によるもの。したがって、破綻するような第三セクターに税金を出資したことについて、市長や市議会の責任が問われることになるわけだ。

韓国の釜山と下関の間を運航する第三セクターの会社である日韓高速船株式会社については、補助金として平成6年5月に支出された3億8000万円が地方自治法232条の2にいう「公益上必要がある場合」に該当するか否かが訴訟で争われた結果、「公益上の必要性がある」と市長が判断したことについて裁量権の逸脱があったと認定され、市長に対して3億円あまりの損害賠償請求が認容されることになった（広島高裁 平10（行コ）第11号・損害賠償請求控訴事件、平13・5・29判決、原審山口地裁平10・6・9判決）。

土地バブルの崩壊と経済不況が続く中、日本では第三セクターの破綻が顕著になり、大きな社会問題となったが、そんな中で下されたこの判決は日本国中に大きな影響を及ぼすことに……。

映画では、こんな訴訟の話には全く触れていないが、下関生まれの佐々部清監督が、下関生まれの山本譲二を郁子の父親に起用し、下関を舞台とした映画をつ

くるのであれば、そういう社会問題についても少し触れて欲しかったような気がするが……。

## シンプルで心温まるいい映画

この映画には特別面白いストーリーがあるわけではない。主人公の郁子が26年前の七夕の日の記憶をたどることによって、1977～78年という時代状況の下での4人組の女の子の青春と郁子と安くんの初恋の思い出を淡々と描くもの。

また、特に有名なスターが登場するわけではなく、逆に、高校生の郁子たち4人組の女の子はほとんど新人同様の俳優たち。話題を集めようとすれば、主人公の郁子には有名なアイドル女優を起用してみれば……というのも1つの考え方。

しかしパンフレットによると、佐々部清監督がこの映画に起用する俳優には、「どれほど知名度があろうが、芝居が上手かろうが、陸上の出来ない子は選ぶつもりはない」ということだった。

背が高く長い足をもった郁子を演じた水谷妃里は、走り高跳びで1メートル50センチの記録をもっている本物とのこと。こんなこだわりがこの映画に本物のキラメキを生み出している要因だろう。

映画をつくるについては、あまりひねらない方がいい。この映画のように、シンプルに、真正面から初恋の姿と向き合えばいいと思う。

そして、そこに必要なのは、ウソ偽りの飾った姿ではない、本物のひたむきさ。それを持った役者を起用し、それをスクリーン上に表現させるのが監督の腕というものだ。こんな映画私は大好き！

2004(平成16)年7月20日記